

# 槐

かい

岡井省二創刊

令和元年9月号

令和元年九月一日発行 第二十九卷第九号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻第三三九号（毎月一回一日発行）

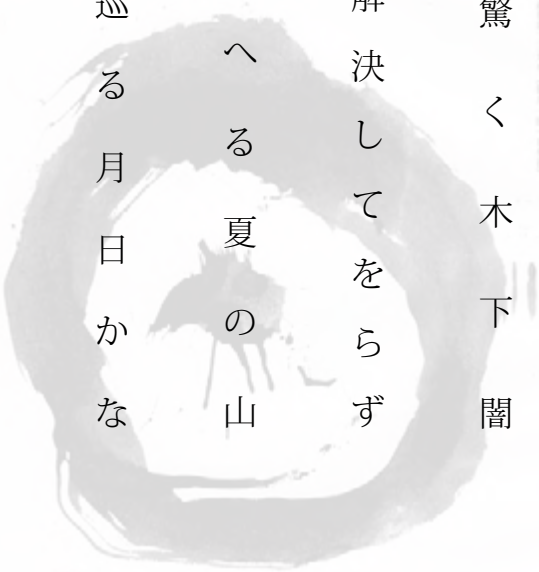


# ハンモック

高橋将夫

図書館に活字ただよふ涼しさよ  
石楠花は女人高野をやさしうす  
清純といふ妖しさのアマリリス  
家を捨てこだはりを捨てなめくじり

放射能で虫家に閉じ籠る  
斑猫も原発だけは近寄らず  
自らの音に驚く木下闇  
梅雨明けて何も解決してをらず  
尋ねれば訝答へる夏の山  
尺蠖の歩みに巡る月日かな  
万全といふあやふさのハンモック



あ

# 槐安集

水野恒彦

花は葉に輝く若葉人を待つ  
あぢさゐの花芽ふくらみ開花待つ  
夏帽子 齡五つ程若くみる  
梅の実のみより加へる小雨かな  
新緑の木もれ日の下夫とゆく

加藤みき

大蚯蚓 小蚯蚓 晴の空の下  
夕立やはやばや心変りして  
罌粟の花 アフガニスタン 思ひをり  
更衣 國民服の父のかげ  
河原からよばれてゐたり 冷し酒

中島陽華

春昼の大曼陀羅の前にゐる  
道産のアスパラを揚げ眞昼間  
ニツカポツカ糸遊の向かうから  
亀鳴いてサチコはトルコライス食む  
なんとなくなう開けし 抽斗仏生会

竹内悦子

狐の嫁入り通りすぎてや蓮植うる  
遠雷やまだ書き終へぬ波羅密多  
貝釘ぼろりと取れて夏柳  
天地や鯉のたたき皿鉢の上  
七百億圓の切符通天閣の夏



雨村敏子

まひまひのしづしづ参る社かな  
水無月の口開いてをる貝の蓋  
青梅に山の音きく父の家  
鬼灯の一途に咲きし花の数  
銀河系へ紫陽花の毬揺れてをり

本多俊子

まつすぐに夏野を行けり振り向かず  
筋書きと違ふ人生柚子の花  
金平糖コロコロコロと梅雨あける  
湖からの星のさざなみ擬宝珠咲く  
滴るや光の重さためきれず

近藤喜子

文人の眼やさしく梅雨に入る  
蜻蛉生る祝ふやうなる水あかり  
角張つてゐるほかはなし羽抜鶏  
噴水や父かと思つむ向かう側  
籐椅子やいくたびも色かへる空

瀬川公馨

螢袋の天使の化生なりしかな  
辛口のカラスのぬたり時鳥  
燕子花の紫紺に尽きてみたりけり  
けふの締めは烏柄杓にまかせたる  
大柄なキスゲに耳打ちしたりけり

柳川 晋

明易ヤ砂漠ノ涯テ二日ガ昇ル  
大阪は都とにはなるまい虎が雨  
ナイーブに澄ます途端に夕立かな  
墓みなとりどりの王子かな  
舳斗雲に明日はならう樟若葉

熊川 暁子

毎日を真面目に生きて梅雨に入る  
白槿誠のあるを見ぬきたり  
芍薬にきつぱり見栄を捨てました  
入滅のゆくて導くほたるかな  
尺とりの針小棒 大国 跨ぐ

江島 照美

レース飾り見えても見えぬ真かな  
熱き人そんなあなたの草いきれ  
山躑躅トワイライトのニンフかな  
歌声に守宮うつとりしてをりぬ  
べたべたとくつつき合うて山桜花

寺田 すす江

星の渦渡り切りたる正覚坊  
十葉の花庭中を占領す  
天水のゆたかに溢る 未草  
雨の日は雨のつぶやき 閑古鳥  
侘び寂びも消えてしまひし墓

岩下芳子

水無月の社の大樹抱きけり  
左右の手に受く極楽の早桃かな  
仰ぎたる天の川より雅楽の音  
荒梅雨のガラスの天井打ちにけり  
桑の実の熟るる麓のジャム工場

有松洋子

田を植ゑて洗ふ手足の鳶の空  
小さき手が父母の肩揉む田植の夜  
ビオトープに悲鳴歓声蛇の衣  
青葉風コンクリートの部屋通る  
傘といふ独りの宇宙梅雨に入る

岩月優美子

大山椒魚度胸据ってをりにけり  
燃え盛るサルビア青春は一度  
梅雨音の時にはタツプダンスかな  
白南風やこころの雲の解けて来し  
水力に憂さも流してみたき滝

近藤紀子

大空に放つ四葩の藍のいろ  
あぢさゐの広葉打つ雨勢あり  
贈られし花束の百合の香に浸る  
切れ長の佛の御眼薄暑光  
君が触れしメロンの迷路なぞりをる

竹中一花

銀のかんざし磨く梅入かな  
姫沙羅や下駄音低く露地に入る  
夏草や神馬の蹄濡れてをる  
瑠璃蜥蜴日の出の貌を持つてをる  
首塚や首夏の明日香に風がうと

中田禎子

極楽へ背を押す茅花流しかな  
バス一団ぼつくり寺の夏椿  
青墨の惨みと余白鯉の皮  
恐竜とアンモナイトと蜥蜴かな  
宙を向くサモトラケのニケ青嵐

吉田順子

人の世へ吊橋一つ紅空木  
風炉点前鯉の口げ動きけり  
茅の輪くぐり濁世に少し遠ざかる  
時の日や時に追はるる吾が余生  
草も木も人も競へり風光る





# 槐市集

久保夢女

初浴衣顔いつぱいに笑ひをり  
松明のかすかに揺らぎ祭笛  
潮風に後れ毛まかせ花石榴  
若竹よ目もと涼しき青年よ  
アマリリスどんと構へて女の座

阪倉孝子

追憶に生きる力や立葵  
貝風鈴はらからの声聞いてをる  
美しく老ゆる鏡よ浮いて来い  
でで虫やワルツ踊りし時のある  
身の内へ青き夕風釣忍

柴田靖子

自由は良い夏蝶の飛ぶ空は青  
田植うるもろもろの生きものの園  
しとしとしと友が友呼び雨蛙  
蚕豆や口一杯の青き味  
燃えてゐるサルビアいつの日か終る

庄司久美子

椰子の木の風にもたれる籐の椅子  
窓の猫三叉路の家の花石榴  
カンナ咲くまるまる穴の埴輪かな  
泉州の不動明王百日紅  
戦国の私きさべ部城址や桐の花



杉原ツタ子

手作りの橋渡るこゑ半夏生  
たつぷりの花南天の風迎え  
炎天や青き異形の蔵王堂  
草も樹も輝き返し朱夏の朝  
空海のマントラ唱ふ更衣

高野昌代

新茶もて最後の一滴老医師に  
出番待つ冷凍鯉の大欠伸  
暮れ泥む時の鐘にて日傘とづ  
虹の橋かけかた探るは理系の徒  
夏の夜の夢を舞ふてごうや蔓

竹村 淳

返納の思案を胸に初夏ドライブ  
愛咲くやあじさいの花七変化  
折鶴も羽ばたいてこい鯉幟  
平野万部おねり  
和讃流る二十五菩薩初夏お練り  
祈りこめ亀の子見送る阿波の海

田中信行

旅立てる人の残り香今朝の虹  
蛇の目傘くるくる回る驟雨かな  
指先で誘ふ悪女や夏の幻想  
水面には逆さ六甲梅雨晴れ間  
その先に箏曲流る青簾

田中美恵子

素麺の腰の強さや播磨灘  
涼しさの土蔵造りの店に入る  
北海の海の碧さや矢車草  
晩節の父の眼差半夏生  
夏惜しむ手の平にある二枚貝

時澤 藍

梅雨の鬱いやす手立ての見当たらず  
夏椿ころんころんと眠りけり  
入梅や古新聞を束ねをり  
金宝樹仕上げばつちり付け睫毛  
開け放ち風道つくる梅雨晴れ間

# 槐集

## 高橋将夫選

一天にこころ洗はる滝の音  
大阪 藤田美耶子

薫風の溶けて露天湯あをあをし  
ライオンの阿吽の像にばらの風  
瞑想はほたる袋の中に座し  
濃紫陽花水の匂のこぼれけり  
蜃気楼アプリに神の手隠されて

平野 多聞

大仏の鼻息荒し紅の花  
まひまひやたまには逆に回れぬか  
水鉄砲恋の始まる罰ゲーム  
和を大阪サント探し茅の輪知恵の輪ポピーの輪  
鬱積が送りたる驟雨かな

出利葉 孝

青嵐デキシールアンドジャズ奏で  
足下の痒みを払ふ団扇かな  
窓ガラス守宮みつめ凝視る奥の奥  
山寺は地獄極楽蟻地獄

決断の大義は失せて梅雨に入る  
芦屋 田中 信行

横文字の並ぶプレゼンクールビズ  
片道の航空券や雲の峰  
酒五合幽人招く夏座敷  
夕風はデジャヴの匂麦の秋  
たがために神降臨す虹の橋

岡崎 柴田靖子

余花にあひ熱きもの胸過ぐる  
立葵弱音はかずにシャンシャンと  
なにもとむ命をまとに火取虫  
眠られぬ夜や含羞草ねむらせて  
日出づる国に生まれて心天

竹原 久保 夢女

迷ひ道南瓜の花に向き合へる  
めまとひや癩癩玉を隠し持つ  
梔子の花よさびしと告げぬまま  
母の背な父の背中や夕焼す

# 銀河往來

## ◆槐集観照

瞑想はほたる袋の中に座し 藤田美耶子  
なるほど、蛍袋の中ならよい瞑想ができそう。それにしても、  
蛍袋の中とは。

〈薫風の溶けて露天湯をあををし〉の句では、露天湯に薫風  
が溶け込み、〈濃紫陽花水の句のこぼれけり〉の句では紫陽花  
から水の句がこぼれる。どちらも美しい感性。

〈ライオンの阿吽の像にばちの風〉は三越と中之島薔薇園の  
景のコラーージュであろう。ライオンと薔薇の風の取り合わせが  
美女と野獣を思わせて魅力的。

蜃気楼アプリに神の手隠されて 平野 多聞  
コンピュータはプログラムでいろんなことができる。それ  
らのアプリケーションにはまるで神の手が隠されているようだ  
が、いつてみれば蜃気楼のようなものだという。神の智慧にま  
で及びそうなAIに対する警鐘にも思える。

大仏の鼻息荒し紅の花〉の句、大仏にもこんな一面が有っ  
たのだと、親しみを感じさせる。

〈まひまひやたまには逆に回れぬか〉はなかなかシニカル。  
〈和を探る茅の輪知恵の輪ポピーの輪〉の句、平和の輪は様々  
の方法で広げていかなければならないと改めて思う。

鬱憤が迸りたる驟雨かな 出利葉 孝  
急に降りだしてすぐに止んでしまうにわか雨。一挙に鬱憤を  
放出してさぞ心が軽くなったことであろう。

〈山寺は地獄極楽蟻地獄〉の句、ひっそりした山寺の境内の  
景が脳裏に浮かんでくる。

〈青風デキシーランドジャズ奏で〉は青風とデキシーランド  
ジャズの取り合わせが軽快。

〈足下の痒みを払ふ団扇かな〉は団扇で蚊を追い払っている  
光景がユーモラス。

〈窓ガラス守宮凝視る奥の奥〉は窓ガラスに張り付いている  
守宮に存在感がある。

夕風はデジャブの句ひ麦の秋 田中 信行  
麦畑を夕風が渡る光景はいつかどこかでみたような懐かしさ  
を呼ぶ。

〈決断の大義は失せて梅雨に入る〉の句、大義が無くなって  
は決断もおぼつかない。まさに梅雨入り状態。

〈酒五合幽人招く夏座敷の幽人、酒五合、夏座敷はなんと  
も乙な一幅の景。

眠られぬ夜や含羞草ねむらせて 柴田 靖子

含羞草（おじぎそう）は葉に触れると閉じて葉柄を垂れ、し  
ばらくして開く。温度、光などの刺激にも反応。別名ネムリグ  
サ。眠れなかったおかげで、一句授かってよかった。

〈たがために神降臨す虹の橋〉には夢と希望がある。

迷ひ道南瓜の花に向き合へる 久保 夢女  
南瓜の花と向き合って、はたして進む道は分かったのだろうか。  
とぼけたところがとても愉快。〈以下略〉